
Hope&Despire

SANTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hope & Despire

【Nコード】

N8761I

【作者名】

SANTA

【あらすじ】

主人公の街は一転して死の街へと変わった。

極限状態のなか、絶望に囲まれた空間のなかで希望を見つけだし、足掻いていく人間達。

勇気と恐怖、情義と利害、安心と不安、そして希望と絶望。

裏表の二つのものが死の街を交錯する

始まり（前書き）

初めて書いたんで下手くそだと思うけど頑張って読んでください

始まり

M大学の門は夕方になるといつも賑わう。

生徒達がぞろぞろと門から出て来る中、五、六人の集団がワイワイと騒ぎながら門から出てきた。

その中で一人の男がいた。

彼の名は田村俊雄（18）

丸坊主が一番似合う頭をしている

彼は楽しそうに騒いではいるものの、どこか物足りない顔をしていた

彼はゲームセンターでさんざん遊んだ後、友達と別れ、自分のアパートへと帰っていった。

ドアを開けると安心感のある匂いが漂ってくる

「……。」

部屋の中は真っ暗でカーテンのすき間からはかすかに夕日の光が差し込んでくる

俊雄は部屋の明かりをつけるなりベッドに倒れるように寝転がったしばらくして起き上がると、

ふらふらと外へ出ていった：

外はすでに電灯がつきはじめていて、空はだんだんと暗くなっていく道を歩いていると、隅で壁に手を付きながら苦しそうに歩いている男がいた。

俊雄は

「大丈夫ですか？」と一声かけたが、男は返事もしない

「ハア ハア：ア」

息が荒い：。

男は顔を上げた。

暗くて顔は良く見えなかったが、顔色は悪そうだ

そして何もいわず
また歩き出した。

「……？」

俊雄は疑問めいた顔をしてまた歩き出した

俊雄は今夜の夕食を買うため、コンビニへ入っていった。

そして俊雄お気に入りのおにぎりとおペットボトルのお茶を手にとつてレジへと運んでいった

毎日おにぎりばかり食べているせいか、心なしか顔もおにぎりに似てきたような気がしてきた。

俊雄はコンビニを出て、

外を歩いていると、

顔色の悪い人をちらちらと見かけた。

（インフルエンザ…流行ってんのかな？）

だがその顔色は土のような色をしていて、とてもインフルエンザとは思えない。しかも今は夏だ。

俊雄はさつさとアパートに帰った

家に着くと食べ物が入った袋を置き、お膳を前にして座り、テレビを見ていた……。

隣の部屋がやけに騒がしい…。

最初は別に気にしていなかったが、その騒音はひどくなる一方である。

…ドンドン！ガシャン！

俊雄はテレビを見ながら

「誰や！」

部屋の中で鬼ごっこやっとなのは！

外行ってやらんか！」

と叫んだ

しかし俊雄の声も届かず騒音はさらにひどくなっていく

「ほんまに鬼ごっこやってんねんちゃうやろな…」

そう言って耳をすました。

…ドンドンドン！ガターン！

「助けて！」

助けてくれー！」

……助けっグチャ！…

グシュ！ブシャ！

プシューー………ピチャピチャツ

「なんや！？なんや！？」

俊雄はそう言っただけで部屋を出た

そして何事かと隣りの部屋のドアを開けた…そして。

バタンツ…！

ドアを開けると信じられない光景がそこにはあった…。

ヒトが人を食べていたのである…

部屋は真っ赤に染まっていた。

鮮血に染まっていた。

俊雄は非現実的な光景を目にし、腰が抜けた。

「え、え、何？え！？警察、警察！」

すぐに彼は警察を呼ぼうと立ち上がろうとしたその時であった。

その人間とは思えぬ顔が俊雄をじっと見つめていた。

あまりの恐怖に俊雄は再び腰が抜けた。

「ひっ、ひいー！！」

上手く立ち上がれない…。

すると死者は、こっちに向かって歩いてきた。

俊雄は這いながら、そのまま外へと駆け出した

「な、何あれ！？何？」

俊雄の声は震えていた。

外ではいつのまにかサイレンの音が鳴り響いていた。

やがてサイレン音に続き、悲鳴、銃声まで聞こえてきた…

始まり（後書き）

補足情報

田村 俊雄（18）：丸坊主がトレードマーク、身長169くらい。
高校時代は運動部であり、ガタイもまあまあ。
足が遅い。

出会い（前書き）

もしもある日、自分がこんな事になってしまったら

この物語はごく普通の一般市民があらゆる手段を使って脱出をはかり、協力し、そしてときには勇気を出して強大な敵に立ち向かう。という点を意識しました

出会い

そこはまさに異常な光景だった…。

いつもの平和な景色とはまるで打って変わって別世界だった。

大通りに集まる無数のパトカー。

街にはおびただしい数のゾンビで溢れかえっている。

あちこちから人の悲鳴が聞こえてきて、そこはまさに地獄絵図の中にでもいるようだった

…俊雄は無我夢中で走った。

「何で、何でこんな事に…」

俊雄は何度もそうつぶやいて、ゾンビを避けながらただ走っていた。

俊雄の頭上に広がる夜空は曇っているせいか、

星も月も見えない。

どれくらい走っただろう…

何の考えもなしに、絶望に囲まれた空間を夢中で振り切るようにただ走っていた

しだいに悲鳴も銃声も聴こえなくなった、
聴こえるのは死者の呼び声ばかりだ。

「独りは嫌や…。

誰か、誰か助けて！

誰かおらんのか！？」

俊雄は泣きそうになりながら、嘆いた。

ゾンビがうごめいてる闇の中に独りでいるのはあまりにも心細い

だがしばらく走っていると、ふと交番が目についた。

「あそこやったら何とかなるかも…。」

俊雄は迷わず交番へ走って行って交番の前に着くと、

「頼むからゾンビ出てくんなよ。」

とそう言って恐る恐るドア開けた。

開けた瞬間、誰かが叫んだ

「誰だ！」

驚いて声のほうに目をやると、
そこにいたのは若い男だった

すると俊雄は思わず叫んだ

「おう！…に、人間！…」

俊雄の顔に笑顔が溢れる。

俊雄は嬉しかった。

地獄の中で仏に会ったようで、思わず泣きそうになってしまった。

そして俊雄は続けて声を震わしながら言った。

「や、やっと…」

人間に会えた。」

男もさぞかし嬉しかったろう。

こんな死者だらけの街の中でまだ生き延びている人間に出会えたことがどれだけ嬉しいことか

二人は何もない真っ暗な空に、たった一つだけ星の光が差したのを確かに見た

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761i/>

Hope&Despire

2010年10月9日03時38分発行